

2021年6月27日 説教「わたしは羊の門です」

ヨハネの福音書 10章 1～9節

今朝は、主イエスが「わたしは羊の門」と言われた点を学びましょう。

1. 羊と牧者 (1～3節)

- ①羊の囲い (1) 「まことに、まことに、あなたがたに告げます。羊の囲いに門から入らないで、他の所を乗り越えて来る者は、盗人で強盗です。」これはイエス・キリストのたとえ話です。羊が群れから外れることなく、外的からも守られるように囲いがあるのです。そして、その囲いには門があるのです。誰も、その門から出入りするはずで、ところが、その囲いの門ではない箇所から、囲いを乗り越えて来る者があるとすれば、それは不埒な目的があるからでしょう。羊たちを盗みに来る輩でしょう。もしかすると、強盗とあるように、力づくでもって奪おうとする者達です。
- ②羊の牧者 (2) 「しかし、門から入る者は、その羊の牧者です。」しかし、なんのためらいもなく、当然のこととして堂々と、門から入る存在があります。それは、その羊の牧者です。囲いを管理している羊飼いは、その中にいる羊たちを見守りついているのです。鍵も持っていますし、その門の適切な開け方も知っています。そこに入る目的は、羊達の様子を見たり、囲いの中の様子をチェックしたりすることです。
- ③声を聞き分ける (3) 「門番は彼のために開き、羊はその声を聞き分けます。彼は自分の羊をその名で呼んで連れ出します。」このたとえの設定では、門番がいるのです。門番は文字通り、門の前に立っていて、門の開け閉めをするのです。ここでは、おそらくはこの囲いの所有者である牧者がやってくれば、そこを開けるのです。牧者は中に入ると、羊達に声をかけます。羊はその声を確かに聴き分けることができます。羊飼いは、おそらくどの羊にも名前をつけているのです。「さあ、ピーちゃん出かけるよ。」などと声をかけて、外に連れ出すこととなります。

2. まことの牧者と偽物 (4～6節)

- ①牧者に従う (4) 「彼は、自分の羊をみな引き出すと、その先頭に立って行きます。すると羊は、彼の声を知っているので、彼について行きます。」牧者は、一匹(頭)ずつ、羊の名前を呼びあげながら、羊たちを引き出し、先頭に立って歩きはじめます。草を食みに、牧草地に出かけていくのです。牧者の声を聞き分けている羊たちは、牧者を信頼して、ついていきます。これまでの経験から言っても、この牧者についていけば間違いのないことを、その羊たちも知っているからです。ルカの福音書 15章には、100匹の羊たちが羊飼いに連れられて牧草地に出ていき、一匹が迷子になったというたとえ話がでできます。大変な仕事だったことがわかります。
- ②ついて行かない (5) 「しかし、ほかの人には決してついて行きません。」

かえって、その人から逃げ出します。その人たちの声を知らないからです。」牧者を信頼する羊たちですが、他の人には簡単にはついていきません。ついていけないどころか、その人からは逃げ出すのです。どのように区別しているかといえば、その声でした。信頼する牧者とは違う声であれば、危険だと思いついていけないのです。

- ③話を理解しない (6)「イエスはこのたとえを彼らにお話しになったが、彼らは、イエスの話されたことが何のことかよくわからなかった。」イエスさまがされた、たとえ話は大変わかりやすいものでしたが、これを聞いていた人々はその意味がわかりませんでした。確かに、たとえ話というのは、やさしい話であっても、その意味をさとることはやさしくありません。

3. 安らかに出入りし (7~9 節)

- ①羊の門 (7)「そこで、イエスはまた言われた。『まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしは羊の門です』」人々の反応を見ながら、主イエスは別の角度から教えられます。1 節にもありましたが、「まことに、まことに告げます」(アーメン、アーメン、レゴー、ヒューミン)と言われた時には重要なことが語られることが多いのです。そしていよいよ今回のテーマの言葉が出てきました。「わたしは羊の門です」(エゴー・エイミ、ヘースーラ、トーン プロバトーン)。エルサレムにはいくつかの門があつて、「羊の門」もありました。でも、ここではたとえ話との関連で考えるべきでしょう。羊たちの囲いの出入り口にある門がイメージされているでしょう。主は、ご自分は羊たちが出入りする時の門だと言われるのです。例えば、学校の門では生徒達と部外者とを区別するでしょう。ですから、羊の門においては、その門に入るための資格者であるかが照合されるのです。
- ②盗人と強盗 (8)「わたしの前に来た者はみな、盗人で強盗です。羊は彼らの言うことを聞かなかったのです。」主イエスは、「わたしの前に来た者は、盗み人や強盗です」と手厳しく、指摘されます。彼らは、たとえ話によるならば、門以外のところを越えてきたのです。うまく、彼らが羊たちを連れ出そうとしても、声が違いますから、彼らの言うことを聞くことはないのです。羊は弱く知恵がない面もありますが、羊飼いの声は聞き分けて、本物の牧者でなければ、従わないのです。
- ③救われます (9)「わたしは門です。だれでも、わたしを通して入るなら、救われます。また安らかに出入りし、牧草を見つけます。」主は再び言われます。「わたしは門です」(エゴー・エイミ・ヘースーラ)。主イエスという門をくぐるということは、この方が、彼らの身代わりとなって十字架にかかって死んでくださるほどの愛なる方であることを、信じるかどうか照合(チェック)されるのです。もし、信じるならば救われるのです。そして、まことの平安を与えられて、この門の出入りをしながら、牧草にあずかることができるのです。

《結論》

5月16日から、ヨハネの福音書の中にある、イエス・キリストが「わたしは~である」(エゴー・エイミ)と言われた箇所から学んでいます。「わたしはいのちのパンです」を二回。「わたしは世の光です」について二回見てきました。

今朝は「わたし羊の門です」という主の言葉からの学びです。さて、今朝もワンちゃんたちが、この部屋にいますが、羊はヘブル人が最も愛した動物と言って良いのです。羊はおとなしくて素直で、従順なのです。しかし、一方では弱いのです。また、迷子になりやすいのです。間違った方向に一団で突き進んでしまう可能性があります。警告されても知らん顔のこともあります。こうした羊を私たち人間にたとえて語られます。たとえば、旧約聖書の詩篇 23 篇には、「主は私の羊飼い。私は、乏しいことはありません。主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。」とありますが、羊飼いを主とする私は、まさに羊なのです。今朝の聖書箇所でも、羊は私たち人間で、主イエス・キリストは牧者(羊飼い)なのです。この羊は迷いやすく弱者達ですが、「羊の門」をくぐった者であるならば、羊飼いの声を聞き分けることができるのです。つまり、イエス・キリストが私たちの罪のためにこそ、身代わりになって死んでくださってよみがえってくださったという福音を信じてきた者であるなら、その方の愛を知っているのです。その方の声を聞き分けることができるのです。

それではどのような違いを聞き分けるのでしょうか。新約聖書時代にあつては、律法主義がありました。また、コロサイ人への手紙 2 章 8 節にある「むなしいだましごとの哲学」という表現には、ギリシャ哲学に影響された人間主義的な信仰もありました。今日であれば、合理主義や無神論に影響を受けた神学、エホバの証人(ものみの塔)、モロモン教、統一協会のような異端信仰はもとより、この世の様々な私たちの信仰に対抗する教えがあります。物質主義、お金第一主義といったものも、私たちの信仰をむしばみます。

こうした考え方や生き方とキリストの福音とを聞き分けることは重要です。

そのためにも、福音とは何なのか、イエス・キリストはどのような方なのかを、はっきりと知ることは大切です。今朝、私たちはキリストが「わたしは羊の門です」と言われたことを学びましたが、キリストという門をくぐる時には、自分が主なる神以外を主としていないかと問われたいのです。また、自己中心に基づく数々の罪を容認している

のであれば、それらを率直に告白していきたいのです。羊は、弱いのですが案外、頑固な存在でもあります。私たちも自分の我をなかなか捨てない側面を持っています。また、いろいろな誘惑も周囲にはあります。悪魔は、強盗のようにして、私たちの魂を食い尽くそうとねらいをつけています。十字架の主の愛に触れて、赦しと和らぎを与えていただいでいきましょう。

「わたしは門です。だれでもわたしを取って入るなら救われます。」とありますが、罪を赦されて自由と解放、喜びをいただきましょう。「安らかに出入りし、牧草を見つけます。」とありますが、今ある思い煩いを、主に委ね、平安を当たられ、牧草にあたる主の御言葉をいただいでいましょう。そして、羊たちのように、キリストの声を聞き分け、キリスト中心に生きていましょう。